

「日常生活を過ごしながらか市民活動に参加する」ための前提条件を  
問い直す—余裕があるから参加できるのか?—



開催日時：2021年3月24日（水）19：00～21：00

参加者：24名（運営含む）

**話題提供者：** 池谷美衣子さん（東海大学）  
赤川泉美さん（宮城県名取市閑上公民館主事）  
岡本祥公子さん（認定NPO法人サービスグラント）  
**コーディネーター：** 斉藤仁一朗さん（東海大学）

今回の企画では、大人の社会参加、シティズンシップのあり方について議論をしました。

最初は本企画の趣旨説明からです。「子どもに〇〇な市民になってほしい」という思いが募る一方で、果たして大人は日常生活の中で、市民活動に関わることが出来ているのだろうか。仮に出来ていないのだとすれば、それは「余裕がないから参加できない」のだろうか。これらの論点を複数の視点から深めていきたいという点を、参加者全体で共有しました。

続いて話題提供です。池谷美衣子さんからは過労死遺族による社会運動の展開や関係者の実情について、「過労死を考える家族の会」に焦点を当ててご紹介いただきました。話題提供を通して、「正しい参加」が理想化されることへの懸念や、個々人の「余裕のなさ」を集団で乗り越える可能性についてもご指摘いただきました。赤川泉美さんからは、宮城県名取市の公民館での「地域力向上講座」の実践についてご紹介いただきました。講座全体が、各チームで設定した理念を実現するプロセスとして設計されていることや、最初は消極的だった参加者が徐々に主体的に変化していくプロセスを詳細にご紹介いただきました。岡本祥公子さんからは、NPO法人サービスグラントが、プロボノのボランティア活動を推進する様子についてご紹介いただきました。ビジネスパーソンが仕事のスキルを活かしつつ、プロジェクト的にボランティアを進めていく実態についてご紹介いただき、これからの時代におけるプロボノの可能性についてもご説明いただきました。

話題提供の後には、グループに分かれて10分間のディスカッションです。「話題提供を受けた感想」や「自分の生活を振り返って思うこと」をグループで共有し、その後に参加者全体でも共有しました。全体共有の際には、「社会参加とはレベルの高いものだと思えていたが、もっと身近なことが社会参加なのだと気づいた。」「そもそも余裕の有無を他者が言うてよいことなのか。その人にとっての優先順位の問題ではないか。」「発表を受けて、『緩やかな参加』『参加の入り口の多様性』などが印象に残った。」など、様々な感想が出てきました。

議論の中では、大人が市民参加することを公言しづらい現状についても論点が及びました。その中で、「一つのことに専念することを美德とする文化」が日本にあり、多様な市民活動への参加を妨げている可能性があること、「あれもこれも、色々とやれることが文化的な価値観として重要ではないか」などの問題提起もなされました。また、「市民活動を通して緩やかな繋がりを求めている大人は多くいる」ことや、「あくまで参加者がやりたいことをやっている」という感覚が活動を継続させる秘訣であるなど、様々な指摘もありました。

企画の最後に、きらびやかな参加だけでなく、日常生活で様々な制約を抱える人々にも可能な緩やかな参加のあり方について、言語化していく必要があることを確認しました。

主な企画運営：斉藤・古野・川中／報告担当：斉藤